

平成 27 年度 「県と市町の地域づくり連携・協働協議会」(地域会議)
1 対 1 対談 (桑名市) 会議録

1. 対談時間

平成 27 年 8 月 28 日 (金) 9 時 15 分～10 時 15 分

2. 対談場所

桑名市立深谷保育所 ひだまりサロン
(桑名市大字下深谷部 4 8 7 9 - 3)

3. 対談市町名

桑名市 (桑名市長 伊藤 徳宇)

4. 対談項目

- 1 子育て少子化対策 (本市独自の子育て支援施策について)
- 2 障害等の早期発見・早期支援に向けて (発達障害のある幼児・児童・生徒に対する支援について)
- 3 公民連携について (公民連携を視野においた行財政改革の取り組みについて)

5. 会議録

(1) 開会あいさつ

知 事

おはようございます。本当に、桑名市さんと今日 1 対 1 対談の時間をいただきましてどうもありがとうございます。最近は来年の伊勢志摩サミットに向けてジュニアサミットの開催ということで提案に来ていただきました事、大変感謝を申し上げたいと思います。

これから外務省とさらに調整していく中で、まずそもそもの開催、それから三重県での開催、というのを勝ちとっていきたいと思いますので、その中で大きな材料としてご提案をいただきましたので外務省としっかり調整をしていきたいというふうに思っているところであります。また今年 5 月、それぞれ山鉾サミットであるとか、七里の渡しの鳥居の竣工であるとか、非常に桑名が注目を浴びたそういうような年であると思います。引き続き、今日は情報発信とはまた別の事も含めての議論となるとは思いますけど、有意義な時間としたいと思いますので、どうぞよろしく申し上げます。

桑名市長

おはようございます。今日は私と知事の 1 対 1 対談ということで、知事にお

かれましては大変お忙しい中桑名までお越しをいただきましてありがとうございます。

今日の桑名は朝から、3時11分に大雨警報が出たということでありましたけど、なんとか朝のうちに雨も上がりまして警報解除されたということで、今日はこの深谷保育所にお越しをいただきましての対談ということになります。今日は高校生も来てくれて、ありがとうございます。

これまでは1対1対談ではどちらかという桑名市からこういうのを県にしてくれませんか、といいますか要望のような形のものを1対1対談でやってきたわけでありまして、今回ちょっと変えていこうということで、今桑名市が取り組んでいる事を知事もご覧いただきながら、特に今回子育ての事がメインになるかと思っておりますけど、同世代で今子どもを育てながら首長をやっている立場として色々な話し合いができれば、色々な課題の話ができたり、また将来に向けての色々なお話ができればいいなというふうに思っておりますので、今日はどうぞよろしくお願ひします。

(2) 対 談

1 子育て少子化対策（本市独自の子育て支援施策について）

桑名市長

まず、少子化対策ということで、県や桑名だけでなく日本中どこでも非常に大きな課題でありますけど、少子化対策をどうやってしていくのかというのを大きな課題として取り組んでいかなくてはいけないというところではありますけど、肩ひじ張った大人としての色々な会議をしたりとかですね、非常にまじめな議論をしているところではありますけど、もっとシンプルなところに解決法があるのではないかというふうに思っていたり、解答がひとつあるんじゃないかという思いも持っております。今日は知事にはですね、桑名市と三重県と一緒に共同で事業をしていたものを見ていただいたところではあります。今日見ていただいたのは、正式名が「わくわくコミュニケーション事業」という事業でございます、先ほど申し上げましたように桑名北高校の生徒たちが定期的にこの深谷保育所ともうひとつ多度保育所という2ヶ所に来ていただいてですね、そこでお子さんと高校生の生徒が1対1のパートナーを作って、年にだいたい20回ぐらいですかね、複数回ずっと一緒のパートナーとして遊びをします。そのことによって高校生はコミュニケーション能力を高めようというのが狙いですし、子どもたちも違う世代のお兄さんお姉さんと触れ合っで楽しむというのを狙いとしてやっているというのがあります。

このことで私が思うのはですね、そういった狙いだけではなく、やはりこの父親になる母親になるという親になるという、子どもを育てることが先に体験できているという、親になる前に体験できているという非常に大きなことなんじゃないかなというふうに思っています。

先ほど知事とも見ながら話をしていたんですけど私たちの世代の時っておそらくこういうことはなかったと思います。昔、地域のコミュニティがしっかりしている時はですね、例えばお祭りだとかそういう所で中高生の子たちが小さい子と会うとか赤ちゃんをみるということが結構あったと思いますけど、私もですけど中学の部活が忙しいとか受験勉強が忙しいとかになってくるとですね、自分と違う世代と中々会わなくなってきた、そういうところでですね子どもが産まれた時に自分の子どもが初めて抱っこする赤ちゃんだった、ということが起こってきているんじゃないかというふうに思っています、こういうのをしっかりやっていきたいなと思っています。

今「わくわくコミュニケーション」が高校生を対象にしたもの、そして桑名独自で「中学生のわくわく子育て体験事業」というのをしています。これはもう一つ下の中学生の段階で、赤ちゃんを抱っこする、というのを基本に事業をしているんですけども、お母さんと中学生と赤ちゃんがチームを作ってもらって子どもをあやしてもらおうというのをやってもらっています。お母さんも初めて中学生が自分の赤ちゃんを抱いて寝かしつけるのを見ると、お母さんも感動して泣くと、そういうのもあったりしてですね。色々な体験という部分が非常に大事なんじゃないかなというふうに思っています。その辺を含めてちょっと知事と色々とお話をできたらなというふうに思って今日はこういうものをひとつ、議題とさせてもらったということでもあります。

知事もお子さんを育てられてということだと思いますけど、少子化対策について知事の思う所を色々お話をいただければなというふうに思います。

知 事

ありがとうございます。今、高校生たちの様子を見て、非常にうれしく思いましたし感激をしました。「お父さんになりたいですか?」「子ども欲しいですか?」と聞いたらみんなこういう体験があったから、より強く子ども欲しいなというふうに思ってくれたように感じましたし、そういうお父さん像とかお母さん像みたいなものを自分なりに持てるような機会になっているのかなというふうに思います。子育ては実際のところやっぱり大変ですけども、でも、その大変さを超えた楽しさですとか幸せ感というのがあるぞ、というのをこういう時期に感じるができるというのは非常にいい機会じゃないかなというふうに思います。全般的なライフプラン教育という形で小学校・中学校・高校・大

学、また成人になる時というような形で、県としては平成26年度からそれぞれのパターンで準備をさせてもらっているんですけども、だんだん年齢が上がっていくと自分の人生に対してリアリティが出てくるので、色々な希望を持っていてもその希望をなくしてしまったり、あるいは諦めてしまったりというようなことが出てくるような時期になってくる。けれども、こういう人生にリアリティができてくる時期にこそ、こういう子どもと接する機会があるというのは、さらに「子どもが欲しいな」「そういう家族形成をしたいな」という希望を持ち続ける、そういうために非常にいい事なんじゃないかというふうに思います。

特に、三重県では希望、この少子化対策は希望をかなえるというのが大事で、家族観なので押し付けるというのはアカンとは思うんですけど、でも実際に三重県でいきますと、県民意識調査などで見ても理想の子どもの数というのは2.4人とか2.5人とか、0.5というのはないので2人~3人という希望をしているのにも関わらず実際の子どもの数というのは1.6人、0.6というのはないので1人~2人というような状況の、この1人のギャップがあるということなので、このギャップを解消していくために様々な取り組みをしていく必要があるだろうということで少子化対策、色々取り組んでいるところですけども、特に今のライフプランですとかあるいは子育て家庭の支援ですとかそういうのをやっていきたいと思えますけど、結婚の所もそうなんですけど、このリアリティ、大変だけど楽しい幸せだというのを理解させるポジティブキャンペーン的なのをやはりどんどんやっていかなければならないし、僕とか市長とかは真ただ中の世代ですけど、そうじゃない三重県の大人の皆さんにもぜひ照れずに恥ずかしがらずに結婚とほいものだと、「なんやかんやあったけど結婚とか子育てとかいいぜ」というのを若い世代にどんどん言うてもらって、そういうような雰囲気や機運が醸成されていけばいいなというふうに思っていますけどね。

桑名市長

ぜひこのライフプラン教育みたいな部分で色々な冊子も作っていただいて色々やられていますけど、どちらかというと知識で、例えばお子さん産むにはこの年齢の方が産みやすいですよとかそういうのも確かに高校生ぐらいには大事な部分かもしれませんが、私は体験というのですか、とにかく小さい子とまず会っていると子どもをあやしたことがあるとかですね、そういう体験がおそらく必要なのではないのかなというふうに思っています。そういう意味ではですね、これはまさに桑名市で単独でやっているわけではなくて、この桑名北高校の向井先生という先生がとても一生懸命にやっていただいて、県と桑名市の共同事業でやっている事業でありますけども、私としてもこういうのを

どんどんどんどん広げていただいて、県の中で水平展開とかですねご紹介いただいたりとか、県としての事業で取り組んでいただいたりとか、そういうことをぜひやってもらえるのが、今後、ここで生まれ育つ子どもたちが次の子どもを産みたくなるような、そんなまちになるのではないかなと思います。その辺どうですかね？

知 事

そうですね、まさに今水平展開というか、地域ごとに地域が持っているリソースも違うし地域の実情も違う中で、でもこんな工夫しながら子育て支援とかやっているんだよね、というのをみんなに知ってもらうことが大事だと思うので、県は今年度は国の地域少子化対策強化交付金というのを使って県と県内 29 市町の取り組みを県内の人たちによく知ってもらおうという情報発信の事業をやらせてもらっています。この 10 月からラジオでやったりとか、色々な、インターネットの媒体を使ったりとか、そういうのでぜひこの桑名の取り組みも含めて県内 29 市町のいい取り組みを知ってほしいなと思いますし、県では今年度から東京に移住センターを作って移住の取り組みなんかも一生懸命やっというふうなことでやっています。その時今までは移住の相談受けたり移住の話をするときに「空家ありますよ」「家ありますよ」ばかりだったんですけど、それでは人生形成できないので「こういう働く場もありますよ」とかあるいは「こういう子育てができますよ」というパッケージで示していかないとはいけなし、そういう中では子育てがしやすいということは一つの売りになると思いますし、実際今 3 ヶ月で 190 件ぐらいの相談が移住センターに来ていますが、20 代 30 代で子育て環境がいいところで子育てをしたい、ということで移住センターに来ていただく方、結構多いんで、そういう意味では桑名をはじめ市町で取り組んでいただいている子育てしやすさのために取り組んでいただいていることも、移住のフェーズなんかでも言っていくことが、少子化対策による自然減を止めていくことと、転入転出による社会減を止めて人口減少全体に歯止めをかけていくということにおいてもいいのかなということで、そういう意味では子育てがしやすいということは自然減にも社会減にも効く、そういう一石二鳥のそこを頑張ることなのかなということで非常に重要な施策だと思いますね。

桑名市長

桑名はまだ人口も増えているまちではありますけど、自然減は自然減なんですよね。産まれる子どもが 1,200 人で亡くなる方が 1,300 人。この 100 人を社会増、外から引っ越してきていただく方で埋めて何とか人口が増えているとい

うところになっています。やはり選ばれるまちにしていかななくてはならないという思いで我々も頑張っていますけど、桑名に今住んでる方もずっとこのまちに住み続けたいと思うまちを作るといふのと、やはり外からでも桑名に住みたいと思ってもらうまちを作るのがすごく大事だといふふうに思っています、住むのに大きな要素が3つあるなと思っています、一つは子育てができるというのが特に引っ越しを考える世代の方々からするとまず直近の問題なのでこれはぜひ向上させていかなければならない。もう一つは教育の問題です。しっかりと子どもに学力をつけたいとかですね、しっかりした教育を受けさせたいという方にも選ばれるというのがすごく大事だと思いますし、後は働く場所ですね。この辺りはしっかりと、三本セットですね、我々もしっかり頑張って選ばれるまちを作っていきたいと思っています。これは三重県でも多分同じだと思っていますので、ぜひ子どもが育てやすい三重県ですよ、というのをぜひどんどんPRをしていただき、かつ政策を前に進めていただくということで両輪でやってもらえると、一緒にやっていけるといいのかなといふふうに思っています。

知 事

おっしゃる通りですね。特に昨日かおとといぐらいの僕の定例記者会見で発表したんですけど、県内の県立・私立に通う高校生と保護者の方にアンケートを取って、そしたら何らかの形で三重県の今の地域、あるいは三重県の別の地域に住み続けたいと思う高校二年生の人たちが57%いて、最終的に三重県に住みたいというのが、一回出たりするけど最終的には三重県に住みたいというのが81.5%だったので、「なぜ三重県に住み続けたいと思うのですか？」と聞いたら「理由は無いけど愛着がある」というのが一番多いことと、学ぶ場というのは特に学びたい領域があるというのは非常に重要なことだったので、そういう意味ではこういう子育てがしやすい環境を作るといふことや高校生自身が地域に関わっていく、地域の子育てに関わっていくことで地域に対する愛着がでていくということも住み続けていくということに対して非常に重要なことかな、と。高校生たち、若い世代の思いを叶えていくことをしっかり共に頑張っていきましょう。

桑名市長

はい、がんばっていきましょう。

2 障害等の早期発見・早期支援に向けて

桑名市長

発達障がいの子たちが非常に増えているなという、現場を抱えている我々基礎自治体としてはどこでも感じていらっしゃるのだと思っていますし、桑名でも非常に如実に感じます。どんどんどんどん増えている中で、この大きな課題を、桑名市としてはしっかり受け止めて対応していかなくてはならないと思っていますけど、やはりもっと大きい範囲で考えていかなくてはいけない課題なのかなというふうに思っています。大体、一般的に言われるのはお子さんの1割ぐらいが発達障がいをお持ちだというふうに言われていまして、確かに桑名でも幼稚園保育園から小学校に上がる時の認定委員会で見ていると、やはりちょうど1割ぐらいのお子さんが当てはまってきておりますし、そこには学習障がい、というのはまだ幼稚園保育園から上がる時には学習障がいはなかなか気づけない部分があって、小学校上がってから気づくというのがあります。その子たちがまたもう少し数がいるというふうに考えますと。結構かなりな数の発達障がいのお子さんたちがいるなというのを保育所幼稚園小学校中学校などで我々は今感じています。当然その中で我々としてしっかりやることをやっていこうというふうに取り組んでいますし、今言われています早期発見・早期対応というのが非常に大事だというふうに我々も考えて取り組んでいます。また、県におかれましてもあすなろ学園さんをはじめとして色々な取り組みをされている事には、非常に感謝を申し上げたいと思いますし、またこれから一緒になって取り組んでいければと思っていますけど、これ私も父親として感じる部分ですね、一番難しいのは早期発見は我々で仕組みを作ったらできる部分があると思うんです。頑張ればですね。ただその後早期対応にもっていくまでの部分が一番難しく、最近言われる言葉が早期発見・早期放置という言葉があるんですね。早く見つけて、誰か気付いて誰かが親御さんに「この子はこういう疑いがありますよ」と言っても早期放置されるという案件が非常に増えているというふうに言われています。実際我々もどのように親御さんに理解いただくのかというのを非常に苦慮していまして、例えば現場の保育士さんたちが直接親御さんに言うというのは親御さんからすると非常に抵抗感があつたりするんです。そういう時は一度専門の方に入っていただかないと、子ども総合相談センターがありますのでこの専門の人の入ってもらってその方から親に伝えていただくとか、そういうふうにもうまく伝えなくてはいけないんですけど、親御さんの抵抗感をうまく拭いていかないとせっかく仕組みだけ作ってもうまく回っていかないと思うんですね。

私の子どもが、この前一歳半健診を受けて、またその時でも「ちょっと言葉が足りないようですね」と言われるとドキッとしないですか。これがまた発達障がいと言われたりすると受け入れるのにすごく抵抗があるだろうなと。

私も親になってよくわかるんですね。

ここをどうやってうまく、また子どもたちを早く見つけて対応しようという仕組みを作るというのと親御さんの抵抗感、ここをどうやってうまく両方やっていくのが大事かなと今思っているんですけども、知事も発達障がい部分は非常にお力を入れていただいて、先般、大臣も視察に来られたというように聞いていますけど、知事は発達障がいの事をどのようにお考えなのかお伺いさせていただいてこれからどういうふうにしていけばいいのかなというふうに話し合いができればと思います。

知 事

はい、ありがとうございます。今市長がおっしゃっていただいたなかでいくつかのポイントがあって、まずは早期発見のための仕組みをどうちゃんとやるかということと、そしてその早期発見したことを親御さんにどう伝えていったらいいのかということと、そしてさらに伝えた後に、伝えられた側の親の人たちもこういうサポートがちゃんとなされていくというのが、小さい乳幼児から成人に至るまで切れ目なく、伴走型で寄り添った支援があるよね、ということがちゃんと知らされそれが実際に具現化されているというこの3つ、「早期発見」と「伝える」と「伴走型（寄り添い）の支援」とこの3つが大事だと思うんですけど、まさに三重県では桑名市さんにも来ていただいてあすなろ学園で研修をやっていただいています。みえ発達障がい支援システムアドバイザー、今桑名市さんで2人になっていただいています。これはまさに真ん中の所の、さっき市長がおっしゃっていただいた通り、素人の人やあるいは関係性のできていない人が伝えるのではなくて専門的な知識をしっかり持ち、市役所等の福祉部門等で常に居る信頼関係のある人から家族の状況に応じてうまく事伝えてあげると。専門性と信頼関係の構築というのが真ん中の「伝える」という部分では大事で、その上ではみえ発達障がい支援システムアドバイザーの育成を続けていくということも大事だと思いますので、現在桑名市さんに2人おみえですけど、今まで1年間の研修でないとアカンだったんですが、市町の皆さんの要望にお応えしまして半年の研修でもいいようにしてありますので、色々な職員のやりくり大変だと思いますけどそういう機会を作っていただいてまたあすなろ学園に来ていただいて、また我々も出張で、出前で研修をさせていただくケースもありますのでご活用いただいてそういう人材を増やしてほしいと思いますし、県としても、そういうのを全面的に協力をしていきたいというふうに思っています。最初の「早期発見」の所は、三重県で、あすなろ学園で開発したチェックリスト・イン・三重というのと、チェックリストだけではなくプラス個別指導計画という、子どもごとに個別の指導計画を作るという仕組みを作っ

ていまして、それを保育園とか幼稚園とかでチェックリスト・イン・三重というのをやっていただいて、少し疑義のある子に対して、じゃあどういうふうに指導計画を立てていくかというセットの、パッケージのツールがあるんですけど、これの普及をこれからしっかり図っていきたいというふうに思っています。

特に市町によってはこの2年～5年ぐらいで自分の所の保育所とか幼稚園にどういうふうに導入していくかという導入計画を立てていただいて計画的に、保育園に幼稚園に「チェックリスト・イン・三重と個別の指導計画」を入れていく方策を考えていただいている市町もありますので、桑名市さんにおいても我々も全面的にサポートしますので、そういう導入計画を立てていただいて早期発見するための仕組みを市内全域でなるべくできるようにしていければなというふうに思います。

それから3番目の「伴走型の支援」については、今、パーソナルカルテというものを小学校から、小中高接続できるようにというので、全市町に導入していただいているんですけど、保育園幼稚園から小学校へのここが結構難しいのと、中学から高校の所が難しい。これは親御さんから見たら「ふざけるな」ということかもしれないですけど、行政の切れ目のところで接続が難しいケースがあるので、パーソナルカルテというツールを入れていますが、まだまだ特にさっきの幼から小の所がパーソナルカルテが使えないところがありますのと、あとパーソナルカルテは基本のご家族で持っていただくことになっておりますので、ご家族で「これもっとちゃんと学校で接続してほしいな」というのとかもどんどんご要望いただけるような形にしたいと思いますので、いずれにしても今申し上げたような「早期発見」と「伝える」ということと自分の子どもがそうであってもそれを一人で抱え込まずにみんなで寄り添って「伴走型の支援」ができるような、この3つのフェーズを整えていくことが大事だと思っていますし、今、途上にあるということですね。

桑名市長

現場としては今どういうふうになっているかと言いますと、例えば親御さんがしっかりと自分の子どもは発達障がいであると認めてもらって、医師にかかっていたら、当然我々も加配ということで例えば保育所にも人をつけます、学校にも人をつけますというふうにしたり、また小学校で言えば、特別支援学級に入れるということであればそういうような対応をすることができます。ただ、それを親御さんが受け入れられないとどうなるかという、世にいうグレーゾーンと呼ばれるところにいる子どもたちが今本当にどんどん増えていっているという状況です。そうすると加配が付かない。先生の数が足りない。保育所につく数が足りない。ということで、色々、学級がうまくまとまらない

とかそういうことが出てきているというのがまず現場の大きな課題であると私は思っています。その中で、いくつか知事がうまく分けていただいていた「早期発見」の部分なんですけれど、確かにチェックリスト・イン・三重非常によくできているんですが、ただ、ちょっと難しすぎるというような話もあったりするんですけど、桑名市には今 2 人そういうのを専門で見る人間がいるんですが、埼玉の上田知事とお話をさせていただいたときに、今埼玉県がどうやって考えているかという、こういう施設に少なくとも 3 人、チェックできる、この子は発達障がいかどうか判断できる人を置こうということで、そういうチェックできる人というのを県が育てますと。というようなものを育成されていると聞いています。で、その人たちがうまく発見をして、そして専門の方につなぐというような、そこをうまく切り分けてやっているというものがあるというふうに聞いていますので、そのように県の方でも、もうちょっとシンプルに判断できるような形で改善をしてもらって、多くの人が「うちの保育士がすぐ研修に行行ってすぐにわかる」というような形で取り組めるようなものに改善していってくれるといいなというのがまず 1 つですけど、そのように改善していくというのはあるんですかね？チェックリスト自体。

知 事

そうですね、当然そういうツールというのは、やってみて改善していくというのは重要だと思いますので、そういう声をお聞きしながらちょっとずつ改善しているとは思いますが、とはいえ見逃してはいけないので、一定の根拠に基づいて判定や結果が出せるようなことは担保しつつも、より保育所や幼稚園の教諭の先生方が使いやすいように改善をしていくということは非常に重要だと思いますので、それはまたあすなろ学園とこの 29 年の 6 月にあすなろ学園と草の実リハビリテーションセンターを統合してこども心身発達医療センターというのを作りますので、また新たなセンター的機能を有することとなりますから、ぜひおっしゃっていただいたようなことで改善はぜひ進めていきたいと思えますね。

桑名市長

ありがとうございます。親の受け止め方みたいな部分で私も色々思う部分はあるんですけど、最近発達障がいの専門の先生の中では、今多動性障がいとか学習障がいとかそれぞれ名前が付いていますけど、こういう呼び方を変えているんですって。今、多動症とか言うんですよね。あがり症とか潔癖症とか同じような形でとらえる、一つの個性というんですかね。その症状は改善していかなくちゃいけないですけど、そのような形であれば最初親が受け止めや

すくなるのではないかというようなことが、今進んでいるそうです。

ぜひその辺りも三重県としてもなるべく率先してそういう言葉を使っていたで、親が受け止める時の抵抗感を少しでも少なくするような、そういう取り組みもしていってもらえたらな、と思いますけどいかがでしょうか？

知 事

そうですね、ぜひそういうような研究もしたいですね。そういうカテゴリーを作ることによってカテゴリーが生まれてしまう、名前を作ることによってカテゴリーが生まれてしまうという。僕は自分の若干の反省も含めて言えば、経済産業省の時にニートという言葉が玄田有史さんという東大の先生たちが言ったやつを当時政府の若者の失業の問題の中で使っていた。別に僕が使えと言って使ったわけではないんですけど。そういうことで一つのカテゴリーが生まれてしまったというようなことがあったので、そういう名称などにおける抵抗感とか一つのカテゴリーとかいうのがあると思いますので、そういうことをぜひ研究したいと思いますし、〇〇障がいとかありますけど結局は障がいという壁とかバリアーを作ってしまうのは、ある人が言っていましたけど、障がいを持っていない側の人たちが「あの人は障がいだ」と言うことで、障がいを持っていない人がバリアーを作ったりしているということをどなたかが言っていたのを私も聞いたことがあって確かにそうだなと思ったので、そういうことにしないためにも今おっしゃっていただいたような、一つの名称とか言い方とか、当事者の方々の抵抗感もさることながらそれ以外の人たちがバリアーを作らないようにする工夫という意味でも、大変重要なことだなと思うので、研究したいと思いますね。

桑名市長

確かに、今子どもたちの1割ぐらいと考えていましたけど、おそらくまだまだ増えていくんじゃないかなと我々の統計の数字を見ていくとそんな感じがしますので、いずれにしても、社会全体でそのことをうまく受け止められるような啓発も必要だと思いますし、その辺りもぜひとも力を入れていただければというふうに思いますのでよろしく願いいたします。

3 公民連携について（公民連携を視野においた行財政改革の取り組みについて）

桑名市長

はい、公民連携ということで、PPP とちょっと前から経産省でも言っていたきましたかね、そういうようなことで、パブリックとプライベートがパートナーシップを結んで市民サービスを提供していこうということで、桑名市はこれをしっかりやっていこうということで、今年を公民連携元年ということで取り組みをしています。

公民連携にもいろいろな段階があるなど思っていて、昔桑名市は図書館をPFIという事業で、日本で初めて事業したというようなこともありまして先進的だと言われることもありますけど、今日本中のPPP（公民連携）の考え方はだいぶそれより先に進んでいまして、単なる単体の建物を民間が作るのかどうか、ということではなくて、例えば桑名の図書館でもPFIで建設をしたとはいえ、最終的には税金で、繰り延べで払っていきますから、実際は税金を使ってサービスをしているということになります。それが今、考え方としては税金を投入しなくても民間がしっかりもうかる仕組みが作ってあってその上で市民サービスができていけばいいじゃないかという、独立採算型のPPP（公民連携）の考え方、税金を投入しなくてもできるという考え方も出てきていますし、もう一つ上に行くところとコンセッション方式とか空港でもありますけれども、公共施設を使って、稼いでいってもらってそこで維持管理費も生み出していくというような、そういうような考え方の公民連携も今だいぶ出てきているのかなというふうに思っています。

今、桑名市は健康増進施設と、これまで多度町に元々は税金で健康を増進する施設を作ってそこを指定管理者に出したりして市民を健康にしようという計画があったわけですが、この考え方を改めて、税金を投入せずに行政が持っている土地の上で民間の人が市民を健康にするような事業をしていただくと。建物も建てていただいて、中で事業もそれぞれでやってもらうと。そういうような形の、市民の健康増進をするような事業をしようという取り組みをしまして、今、民間事業者から提案を募集をしているというようなところまで来ています。

また、これは1日の記者会見で言うことであるんですけども、今年は公民連携の窓口をしっかり作ろうということで、桑名市のやっている事業のいくつかをモデル事業とさせていただいてこれを「行政がやるより私たちの方がうまくできるよ」という人たちがいたら、その人たちにどんどんそういうことをやっていただこうと。ある意味、民営化ではないですが、どんどん外の人の方を使ってまちづくりをしていこうという考え方で、今やっていこうというふうに取り組んでいるんですね。で、実は地元の事業所に色々やっていただきたいと私たちは思っているんですけど、なかなか地元の人たちとの理解がまだまだうまくいってなくて、やはり県全体でその辺り底上げしていかないと、我々だけ

が言っている、結局外の人から事業所を運営していただくということになりかねませんので、ぜひ県全体で県の事業所みんな一緒になって県のまちづくりをするんだよというようなそういう雰囲気を出していかないとなかなか大変なのかなというふうに思っています、ぜひ知事も経産省出身ということもありますし、ぜひその辺りの取り組みを前に進めてもらいたいなというふうに思っているんですけど、知事はどうですかね、公民連携。

知事

そうですね、本当に果てしなくそういうアイデアって民間の人たちありますよね。ハードの所だけじゃなくて最近是我々と同世代の横須賀市の吉田市長のところは特別養子縁組にソーシャルインパクトボンドを社会的責任として使って、マッチングとその後の特別養子縁組した親子の支援のようなものをやったりするという、税金 0 円で特別養子縁組がなされ、小さい子どもは家庭的環境で育つことができるというようなことをやったりとか、ハードだけでなくソフトでも本当に果てしなくアイデアがあると思いますので、そういう取り組みを推進していくのも非常に重要だと思います。最近、首長保険ってあるのを知っています？市長とか知事とか町長とか村長のためだけの保険があるんですって。訴訟とか結構あるので損害保険会社が考えて、そこは確かに結構大変な市なんですすごい勧誘に来るらしいです。

僕が 2 期目になって、行財政改革取組、前は取組であったものをプランとして新しくリニューアルする議論をしているんですが、今までの行財政改革取組というのは本当に行政のための行政改革みたいな、内向きの委縮するような感じの取組でした。今度のプランは網羅的に行政改革の色々な細かい取組は書かないけれど、大きな柱でくくっていく中で、一つはみえ県民力ビジョンの中で「協創」というのを掲げているので、まさに市長がおっしゃっていただいた公民連携的な発想と県民の皆さんとともに、新しいガバメントのあり方をひとつの柱に、次の行革プランを立てていこうと思っています。具体的には今弾を仕込んでいるところですが、市長におっしゃっていただいたような考え方を県においても広めていくような、そういった一つのプランを、県民のための行政改革とか未来に向かっての行政改革になるように考えているところですので、色々とお知恵をいただければと思います。

桑名市長

ありがとうございます。それは素晴らしい考えだなと思います。ちなみに宣伝ですけど、公民連携最前線という、日経 BP さんが作っていただいている組織

で、桑名市は、公民連携の積極性の自治体ということで最高級格付け AAA をいただきました。県内では桑名市と南伊勢町の 2 つが積極的だということで AAA をいただいています。ひとは、我々は財政的には非常に厳しくて、なかなか税金の出し方が大変だということもあって、取り組んでいるのもありますけど、一番大きいのは役所だけでまちづくりをやっていても、やはりこれ以上前に進まない部分があると思うので、より多くの人に担い手になってもらって桑名のまちを元気にしていこうとか前に進めていこうということが大事だと思っています。そういう公民連携をしたいということでこれから取り組んでいこうと思っておりますので、知事が言ったような協創という部分に非常に近い考えだと思います。ぜひとも知事に積極的にやっていただくと県内の色々な事業所もそういった雰囲気になっていくと思いますのでぜひそういう取組を前に進めていただきたいというふうに思っています。

知 事

そうですね、特に今回の伊勢志摩サミットがひとつのきっかけになればと思っております。今協賛事業や応援事業もやっていて、自分たちでこんなことができるよ、あるいは民間でこんなことができるよと、日々色々なご提案をいただいています。そういう中で行政と市民の皆さんが、私とあなたじゃなく、私たちが色々なことができるようにしていきたいというふうに思っています。このサミットを契機にそういう投げかけも、また、クラウドファンディングも使ったりしようと思っておりますので、ぜひ、公民連携の視点も含めてやっていきたいと思っております。

桑名市長

サミットの話も出ましたので、ジュニアサミット、今日は、まだ結果をいただいただけでしただけ、これも桑名の、桑名市だけでなく色々な民間企業と一緒にあってぜひ盛り上げていきたいと思っておりますので、ぜひともジュニアサミットを桑名でお願いしたいというふうに思っています。

(3) 閉会あいさつ

知 事

今日は伊藤市長ありがとうございました。また皆さんお越しいただきまして、市議会の先生もたくさんお越しいただきありがとうございました。高校生のメンバーも最後まで聞いていただきありがとうございました。本当はインタビューしたらよかったんだけどな。ぜひ今日感じたことをこれから大事にして

もらえたらなと思います。1対1対談は桑名市さんは特に別途ご要望いただいておりますので、1対1対談こういうスタイルで大きな方向性大きな問題意識を語り合うというのも非常にいいなと思わせていただきました。特に同世代ですのでそういう意識を、方向性を合わせるというのをすごくいいことだと思いましたのでまた今後とも引き続きよろしくお願ひしたいと思います。

今日は本当にありがとうございました。